

---

**退廃の象徴詩**

**現代日本の詩人達へ**

Sai

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

退廃の象徴詩

現代日本の詩人達へ

### 【Nコード】

N3627BA

### 【作者名】

Sai

### 【あらすじ】

現代日本において、詩というものは、その本来の力を失っている。フランス象徴詩が日本に紹介されてから、我々は、そこにある詩の本質に、未だ気付いていないのではないか。では一体我々は、何を頼りに詩を書けばよいのか。象徴詩が持つ、本来的な力を、一連の詩群によって明らかにする。

## 退廃

言葉、その、剥ぎ取られた意味を、返し、再び、言葉に、宿らせる。全き、自然の内の、隠された言葉、ここでも、また、我々は対峙する。何度も、言葉、言葉の、その、内奥の、響きと。

りんごは、あの、退廃の前日まで、りんご、そう、りんごであった。赤い皮の、白い果汁の、酸味、甘味、それは、偉大な、知恵の味、悪味の、見出す、二元の、ハルモニア。

今、りんごは、りんごをやめた。意味の腐敗、そして、取り出す、わずかな蜜。では、蜜は、いかに使われるのか。全く、人は、蜜を舐めただけで、りんごに辿りつけない。全く、りんごは、もはや、りんごではない、のだから。勤勉なミツバチ、おお、自らの針に刺され、二重の死に陥る者、不協の和音で始まる、退廃の時。

さあ、詩人達、墓掘りを見習いたまえ。冬の雪の下、この白は、清浄な死の色、黒い棺は、汚れた生の色。スコップを突き立て、土をえぐる。なんだ、この根は？ あの見事なイチイの木、お前の、化け物じみた枯れ具合、立派な墓守として、邪魔をするのか。邪魔を？ とんでもない。この、骨ばった手を見よ。今しがた、ゲートを開けてきた、この、業績を、むしろ、お前（イチイの木よ！）、褒め称えてくれ。この墓地を、寂しい風景と言うのか。お前が慣れ親しんだ世界が、お前をだまそうとする。この手が持つものが見えるか。これは、かつて、りんごだった。だがここにはもう、それはない。りんご、ああ、かつての思い出、死者の行進のように、再び、戻ってくるとしても！

音楽をやるう。光をやるう。そして、形象をやるう。その内から、おお、偉大なるハルモニア。りんごは復活する。りんごを越えて、なお、りんごを提示する、この、始原のハルモニアのもとに。

足音、なんだろう、さく、さくと、雪を汚す音、黒服の者達、退廃のゲートをくぐり、悲嘆のため息で、死者を、冒瀆する者、歩み寄れ、近くに、そして、顔を、その、しわがれた顔を、見せよ（見せよ、御身の姿）。いや、お前、不吉な黒服よ、去れ、そして、沈黙せよ。

退廃の、死の、それらの真実を、この墓地に、求めるな。抱<sup>いだ</sup>け、お抱<sup>いだ</sup>け、たわいないもの、繊細なもの、未熟なもの、それらの、影の、生の、言葉を。お前のざわめく血のなかで。

## 今は亡き、モルフエウス

光の、なかの、完成、光、音、目に見える、無限。朦朧の扉を開けて、降臨する夢と、その、神に仕えるのか。いや、もはや、人間は、それほど、弱くない。だがこの煙、魅了する、紫の神秘。この香り、耐えがたい衝動は、まだ、我らの地中深く、根を張っている。百年以上、養分を吸い取ってきたのだ。人の心（それがみかけ、衰退しているとしても）、イメージ、そして、退廃に続く、病から。

墓掘りが、なぜ、あんなにも、痩せていたのか。説明できるか。冬枯れの刻、食べ物はなく、見よ、テーブルの上、未完の料理、半焼けのポテトを。まるで土をしゃぶるように、固い芋をかじる。薄暗い木造の小屋、それが、彼の家。彼は、猛烈な刺激の煙から逃れてきた。

「異常な昂揚と、都会の黙殺、俺はまるで、生き長らえた、犬（ワンワン！）、あわれな冤罪者！」

白い手が、すっと伸びてくる、そんな夢に、彼は怯える。毎夜、毎夜、腕の付け根には、モルフエウス！

「お前は、俺が、殺したのだ！」

だが、こんなにも、純粹な、白い肌、もしかして、いや、そうだが、モルフエウス！ お前の曖昧な魂の境界は、まだ、人々、その、一人、一人の、純真な魂の部分を捕まえ、痺れさせている。

ああ、消えていくのか、煙のなかに。輪郭を失くし、溶け合い、個人に還り、もはや、流動せぬ、がらくた達の寄せ集め。意味達よ、言葉が持つべきもの、その所有のありかを巡って、まだ、答えを出せないのか。

おい、詩人達、言葉の故郷を思え。ただ思え。お前の所有となるべき言葉が、ただのひとつ、ひとつ、そう、ひとつでも、あるか？ ではお前は誰だ（名を名乗れ！）？

ヴェルギリウス、ホメロス、アイスキュロス、  
違うのか。

ブレイク、イエーツ、エリオット、  
いや、違う。

ノヴァーリス、ゲーテ、リルケ、  
でもない。

マラルメ、ボードレル、ヴェルレーヌ、

近い！ お前の精神の川上に、ひっそりと顔を見せ、苦い表情で去  
っていく者達。退廃のゲートの先、だが、今は亡き、モルフエウス、  
その住処。

ああ、墓掘りよ、無知な、いや、無意識な必然、お前は、煙を避け、  
そして煙の主の墓を、生業に選んだのだ。その、痩せた細胞の、ひ  
とつ、ひとつ、そこには、今、新たな免疫がある。心を狂わせ、崩  
壊の業で、言葉を飼いならず、そんな道徳に、抵抗する、ひとつの、  
滑らかさ、が、ある。

怖れることなく、手に取れ、鍵を。もうひとつのゲート、超越の、  
ゲート、その、鍵を。

## 復活するオルフェウス

豎琴を鳴らせ、始原の、旅人よ、偉大なる神、にして、人間の、あらゆる可能性、その、頂点よ。御身の腕に、抱いだかれた、言葉、こんなにも甘く、柔らかい、自由、そのもとに、完全な流動を続け、世界の、全て、宇宙の、隅々、にまで、意味、確固たる意味を、付与する。おお、響け、楽師の旋律、神々の、律動よ。ここにおいて、言葉は、あの、奪い、さられた、自らの、意味を、再度、見出す。そしてオルフェウス、狂気の爪に、引き裂かれた、あなたの肢体、美を宿す、風の豎琴、星辰の彼方より、この大地に降りたて。伝えよ、我らの忘れた歌、完全なる調律の、あらゆる必然、存在、形象、意義を。

これら咲き誇る自然に、御身を感じ、御身を捉える、そのような、詩人が、かつて、存在した。花の内に、花である、それ、以上の、目的を創造し、若き踊り子の、天と地を描く、無限の円舞に、添えた。花は、オルフェウス、そう、御身そのもの。宿りし者、そして世界そのもの、ひとつの、風、ひとつの、呼吸に、あなたの調べが、震えている。聴かなければ、ならない。だが、何ということか。公園の大木、海辺の岩、大空の雲、それらの、どこにも、今、あなたは不在。ただ、声のみが、遙かな天蓋にああ、詩人達！ オルフェウス、あの、詩神の、始原の声を、どのような、感覚器官で聴いているという？ 頭の、固い頭骨を浸透し、オルフェウス、その声、その、意味を、かつての、あの、詩人のように、提示してみるがよい！ 彼は耐えてみせた。大いなる息衝きを受け取り、それを、新たな響きにして、返した。オルフェウス、その、調べのもとに。

退廃が、押し寄せてくる。それは、今？ それとも、昔？ あの時、詩神の腕を見つめ、言葉に響きを与え、だが、自らは、成れなかつた、者達、象徴の子ら、魔術の、最後の、子孫達、人間の、単純な

感覚には、詩神の熱い抱擁は、耐えられない。飽和する神経、一体  
どれだけの、詩人の、神経を、オルフェウス、あなたは、焼き切っ  
て、きたことか。

不在のあなたは、しかし、いたるところに、降り立つ。我らが望む  
ところ、望む時、捉えきれないほどの、大きさで。無限を、手に、  
いれよ。自らの内に、その、萌芽を見つめよ。こんなにも　そう、  
我らは、伸展する。オルフェウス、あなたと、今度こそ、完全に、  
一致するため。

## 生と、ふたつの獣

ならば命を、人が、生きるという、その、最も偉大な仕事の内に、添えられるだけの言葉を、果たして、添えてきたのか。むしろ、それは、言葉が必要としていたか。あの、瑞々しさ、何の働きかけ、ゆえでもない、己の内部からの、激しいほとばしり。その流れを受けて、言葉はばらばらに、砕け散ったのでは、なかったか。それを、おお、詩人達、退廃の、詩人達よ、お前達は、四散する言葉に、しがみつき、もはや、意味を、放棄したのだ。言葉の、あの、命、そのものを。

この、無意味な、対峙、お前の、目の前の、ひとつの命に、一体、どれだけのものが、必要と言うのか。お前は見るだろう。命が連れだ、ふたつの獣を。ひとつは赤く、天まで焦がすほどの、たぎる炎、それは、存在を打ち消す、心の大槍。人が、人で、あるための、己の核をくわえ、そして、情念に燃えている。その、激しさを、お前はきくと、侮蔑する。もうひとつは青く、泣き叫ぶ声が、人を、前に、進ませる。それは忘却、そして、思い出、お前はそこに、ともすれば、人が、どのように、生まれてくるのか、その、真実を、見つけるだろう。だが、そこには、お前にとっても、例外なく、至上の忘却が、待っている。お前が、心のあるふりをして、生に近付く時、一体、お前は、生の何に、触れられるというのか。向き合っため、と言うのか。だが、お前が、生の前で言葉を使う時、それは、逃げるため、では、ないのか。そうなのだ、もはや、ばらばらの、褪せた言葉達、その落ち葉に、隠れるように、ああ、退廃の詩人達、命が、どこからやってきたのか、それすらも、忘れてしまったのか。生まれる、と言う。だが、自分を生むのは、自分ではないのか。あらゆるものが、響き渡っていた、あの、隠された洞窟から、人は、やってくる。それなのに、ああ、命に、言葉を添えようなどと見つめたまえ、命は、そう、言葉、そのものではないか。お前が受

け取るもの、そして、激流の、痛いほどの圧力、飛沫<sup>しぶき</sup>、飛び散る光、それらを感じたならば、お前はもう、言葉を、探さなくてもよいのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3627ba/>

---

退廃の象徴詩                      現代日本の詩人達へ

2012年1月12日00時52分発行